わたしは彼らを知っている

ヨハネによる福音書　１０：２２－３０

司祭　ヨハネ 井田　泉

復活節第 4 主日

2025 年 5 月 11 日

聖光教会にて

先ほどの特祷の中に「良き羊飼い、主イエス・キリスト」という言葉があったとおり、今日、復活節第4主日は「わたしたち良き羊飼い、主イエス・キリスト」の主日です。同時に今日は「神学校のために祈る日」と決められています。今は神学生が非常に少なく、聖職志願をする人が激減している時ですが、それだからこそ、いっそうこの日を大切にして祈りたい。良き羊飼いイエスに従って神さまのため、教会のために本気で働こうとする人々が育つ――教会がそういう場になってほしいと、切に願います。

さて、今日の福音書です。イエスは今エルサレムの神殿におられます。たくさんの人が集まっています。

「そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。」ヨハネによる福音書 10:22

今日はここで**神殿奉献記念祭**と呼ばれる特別な礼拝が行われていました。年に1回行う重要な礼拝です。

エルサレムの神殿は、イエスさまからおよそ 1000 年前、ソロモンによって建てられました。けれどもその後バビロニア帝国によって破壊され、ほとんど廃墟と化しました。それから 70 年ほどして、非常な苦心の後、神殿は再建されました。ところがまた今度はシリアの王国によってエルサレムは占領され、神殿は汚されてしまいました。神殿の中にゼウスの像が建てられ、

律法の書は焼かれた。信仰を守って死ぬか、信仰を捨てて生き延びるか、という選択を人々は迫られた。こうした中で、神への情熱に燃えるユダのマカベヤという人を中心として、シリアに対する独立戦争が起こりました。これが成功して、シリア軍を駆逐し、汚された祭壇を新しく奉献し、神に感謝の礼拝を献げたのです。これが神殿奉献記念祭の始まりです。

それから200年ほどたった今日、神殿奉献記念祭が行われて、イエスも弟子たちも参加したのでしょう。けれどもその盛大な礼拝に参加して、イエスの心は満ち足りていたかと言うと、とてもそうではありませんでした。反対に、悲しみと怒りのまじった苦しみがイエスのうちに起こって来るのです。

もともとこのエルサレムの神殿がイエスにとってどういう場所であったか、というと、それこそ祈りの家、神さまと語り合う喜びと平安の場所でした。イエス 12 歳の時の出来事を覚えておられる方が多いと思います（ルカ 2:41-50)。両親はイエスが行方不明になったと思って非常な心配をして捜し回ったのですが、イエスは神殿の境内で学者たちと語り合っておられた。心配したマリアに対してイエスは、「僕が自分のお父さんの家にいるのが分からなかったの」と答えられました。自分のお父さん、つまり神さまの家に自分がいるのはごく自然なことだ。エルサレムの神殿は少年イエスの心の故郷だったのです。

ところが成人して 30 歳を越えたイエスが同じエルサレム神殿で見たのは、そこが「悪どい商売の家」（ヨハネ 2:16）、もっと言えば「強盗の巣」（マルコ 11:17）と成り果てている現実でした。そこは大祭司を頂点とした権威ある人々と、財力のある人々、力ある人々の地位と名誉とお金が支配する世界。壮大な礼拝は行われているけれども、神さまはどこにおられるのか。素朴な信仰を持った民衆は、権力を持った人々から搾り取られているという現実でした。

すでにこうした神殿のありかたに対して何度も批判を繰り返してきたイエスを、神殿当局は監視し、捕らえて殺そうとしていました。すでにヨハネ福音書第７章に、イエスを殺そうと狙っていたことが記されています。

さて今日の福音書に戻ります。イエスは神殿の境内でソロモンの回廊という所を歩いておられました。

「すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。『いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。』」10:24

これは罠です。挑発です。イエスがもしも自分のことをメシアだ、神から来た救い主だなどと言おうものなら、神冒瀆の罪で捕らえる気なのです。

しかしイエスは挑発には乗らず、**「わたしは言ったが、あなた**

たちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている」（10:25）と答えられました。「わたしが行っている業が、神に喜ばれるものか、神に反するものか、しっかり見なさい」と言われたのです。

けれども、このような議論を続けることがイエスの目的ではありません。イエスの心には、苦しみを抱えた人々、自分を慕ってついてきてくれている困難を強いられた人々を守りたい、という愛の熱意が燃えています。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」10:27-28

これはもちろんその時、神殿にいたイエスの弟子たちのことを指して言われ、またそこにはいないけれどもガリラヤ、サマリア、ユダ、その他いろんな所にいるイエスを慕う人たちのことを指して言われたのです。彼らは**「わたしの羊」**だと。

けれどもこれは、わたしたちに対して言われている言葉だと知りましょう。「あなたがたはわたしの羊だ」「わたしがあなたがたの羊飼いだ」と。

「わたしは彼らを知っている」と言われます。イエスはわたしたちのこと、わたしのことを知っておられる。わたしたちの

抱える困難と心配、過去の負い目、将来の不安。わたしの状態。目に見えることも目に見えない心の中のことも、すべてイエスは知っていてくださる。立派な力あるわたしたちではなくて、頼りない、力のないわたしたちのことをよく分かっていてくださる方は、わたしたちに対してさらにこう言われます。

「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」

イエスは良き牧者として、決してわたしたちのことを見捨てない。わたしの手のうちに守って決して誰にも奪わせない、と言われます。

また**「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」**とイエスは言われるのですが、実はイエスのほうが先にわたしたちの声を、わたしの声を聞き分けておられるのです。

たとえば100人の人が集まって礼拝するとします。司式者はイエスです。皆で声を合わせて祈ります。そのとき、イエスには100 人の一人ひとりの声が聞こえるのです。ああ、あの人が祈っている。この人が祈っている。それを心に感じながら一緒に祈るのが、イエスにはこの上ない喜びなのです。

そうして逆のことが起こります。「わたしの羊たち」は、つまりわたしたちは、イエスの声を聞く。聞き分ける。イエスの声がわたしたちの心に届き、わたしたちの祈りの声がイエスの心に届く。心を合わせてともに神に祈る。これが礼拝です。心の

通う礼拝です。それをイエスは回復したい。

　迷い出た羊、ふたりの人がいました。エルサレムを離れて、山を下っていきます。心はイエスを失った悲しみに満ちています。だれかがその後から追いついて来て、一緒に語り合いながら道を行きます。目的のエマオの村に到着しました。食事のとき、追いついてきて道連れになったその人が、パンを裂いて祝福の祈りをしてくれました。そのとき、分かった。心が熱くなった。この方がイエスであると。失われたと思えた羊を追いかけて来てくださった羊飼いイエス。

　この方の手の中にわたしたちは守られ保たれています。

　わたしたちもまた、この方の声を聞き分け、この方に従って人生の道を進みます。

　祈ります。

　主イエスさま、あなたは良き羊飼いとしてわたしたちのことをよく知っていておられ、わたしたちをご自分の羊として命をかけて守ってくださいます。あなたの声を聞き、あなたを信頼して従うわたしたちにしてください。アーメン